

# 静岡の平成

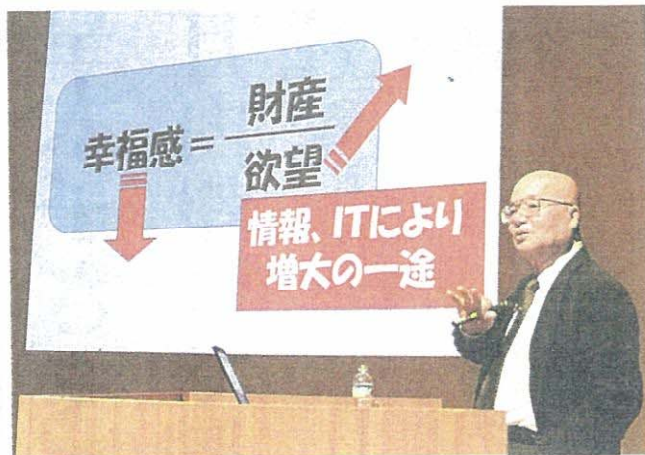
29

第4章 ネット社会の光と影 ⑥完

笑い交じりだった講演会場が一瞬、静まり返った。「ITって、本当に人間を幸せにするんですよか」。講師を務めた静岡理工科大名誉教授の志村史夫さん(70)は袋井市IIが肩間にしわを寄せた。2月16日、同市の社会福祉法人が介護福祉士や保育士らを対象に実施した研修会。約200人の聴衆に志村さんはもう一度、問い掛けた。「私が30年ほど前に抱いた危機感が今、現実になっている。ITを使う側だったはずの人間が、逆に使われる側になっていませんか」

工学博士の志村さんは1983(昭和58)年に渡米し、日本が平成の時代へと移り変わった93(平成5)年まで、米国

## ITで幸せに？



講演でネット社会の弊害を訴える志村史夫さん。ITの根幹に関わる半導体研究に携わったからこそ、危うさも見えるという  
＝2月16日、袋井市の月見の里学遊館

で研究に没頭した。専門は半導体。パソコンやスマートフォンの頭脳として欠かせない部品だ。ITの根幹に関わる技術開発に携わったからこそ、背後にある危うさを訴えている。

現地は当時、シリコン

バレーを中心に、インターネット社会をけん引する企業が次々と立ち上がり始めていた。気鋭の若手研究者にもいきなり、20人の部下が付いた。既成概念に縛られず、自由に研究に打ち込めた。だが、次第に違和感が強くなっていった。自由

## 背後に怪物 危うさ訴え

な半面、評価の基準にあったのは成果主義。常に革新的な技術を生み出せる人物だけが有能とされ、それ以外は容赦なく切り捨てられた。自分の部下を切り捨てなければならぬこともあった。努力の過程など見向きもされない。その構図は、情報を単純化して処理するデジタルの世界に似ていた。ふと、脳裏に巨大な怪物の姿が浮かんだ。「エレクトロザウルス」。人間性を奪い去っていく科学技術の怪物をそう命名した。

帰国した志村さんはいくつもの大学からの要請を断り、地方にある静岡理工科大の教授に就いた。茶畑と自然に囲まれ、人と人が寄り添って暮らす方が、よほど豊かに思えた。そして、平成の時代を通してネット社会に

警鐘を鳴らす書籍の執筆にいそしんだ。

講演で志村さんはい一つの数式を示した。「幸福感＝財産／欲望」と書かれた分数。ネット社会で私たちは情報に振り回され、欲望も肥大化し、より多くの財産を得なければ、幸福感を満たせなくなっているのではないかと説いた。将来を悲観する表情を浮かべた受講者たち。その様子を眺め、解決策を口にした。「私たちは今こそ『足るを知る』べきです。確かにネットは便利。でも、『便利さ』と『豊かさ』は同じじゃない。欲望の分母を小さくすれば、幸福感を高めることができるんです」

(社会部・数崎拓也、佐藤章弘、岩下勝哉、文化生活部・菊地真生が担当しました)